

得意なことを継続すれば
それはあなたの
スペシャルになる

インタビュー
重田玲

某月某日：童門冬二事務所にて。

「おじゃまします」

「はい、どうぞ……」

童門冬二先生は歴史小説家である。

小説家になる前は都庁で、長いこと革新・美濃部都政を支えていた。役所勤めの、いわば固いイメージの童門先生と、自由人・小説家としての童門先生とのギャップに興味があった。その両極端の中に、生きてゆくエネルギーの元があるのではないかと、そんな気がしていたのだ。本に囲まれた事務所で話を聞いた。



目次

第一章	信じれば虚が実になる……………	7
第二章	世の中も価値観も日々変わっていく……………	19
第三章	いい上司とは師になりうる人のこと……………	33
第四章	ときとして諦めることが明日につながる……………	47
第五章	確固たる信念を持つことが大事……………	63
第六章	諦めたことも、本当に必要ならまた巡り合う……………	79
第七章	目の前のことに一所懸命になる……………	95
第八章	みんなおなじ、大人になっても苦労はする……………	109
第九章	組織で生きることが多くを学ぶこと……………	125
第十章	自分の位置は？ まだまだ序の口……………	141



10歳の頃には父親から50銭をもらっては漫談に行っていたと話す童門氏。写真は小学校の修学旅行。伊勢二見浦。一番手前、左端が本人。



志願して出征の決意をしていた15歳の童門氏、旧制中学校の頃。富士の裾野での軍事教練の際の写真。当時は不良一歩手前であったと語る。

第一章 信じれば虚が実になる

たとえその事実が〃嘘〃だったとしても、
あなたが信じるならば、それは〃真実〃になる。

「童門先生はいつもお忙しそうですね……」

「いえいえ。昨日まで、講演会で熊本県に行つてたんですよ。全国津々浦々、沖縄に行つたり北海道に行つたり、するもんですから」

「遠方まででかけると疲れませんか？」

「遠くに行くときはね、距離を考えないで時間を考えるんです。東京から新大阪まで、新幹線で約二時間半。羽田から那覇まで、飛行機で二時間半なんですよ。時間で考えれば、なんてことないでしょう」

「なるほど。お休みはあるんですか？」

「お休み？ ないですね。毎日書いていますよ」

「じゃあ、土日だったり、特別にお休みをとつたりされることは？」

「ないですね。曜日の観念がまったくなくなりました。今日が何曜日かなんて、考えないんですよ。なにか約束があるときは、何月何日、何時から誰とどこで、といった具合で考えます」

「曜日を意識しなくなったのは、やはり都庁勤めを辞めて、書くお仕事に専念され始めてか

らですか？」

「そうですね。それから、一日六時間は寝ないとね。どっか体の調子が悪いなんて、いつていられないから」

「でも、講演会などでそれだけお忙しいと、書く時間を確保するのも大変なのでは？」

「今日はね、朝五時くらいからやっています。書くというか、テープに吹き込むんです。お昼までに、原稿用紙三〇枚ぶんくらいは書きましたね」

「テープに吹き込むということは、すべて頭の中にストーリーがある、ということですか？」

「そうですね」

「それはすごい！」

「頭が二四時間勝手に動いてるんですよ。こうしてあなたとしゃべっていても、別の話が同時進行している。誰はいつどこで殺そうかな、とかね。あ、小説の中の人物のことですよ」

「ぐるぐると頭の中に物語が渦巻いているんですね」

「そう。講演をしていても、考えていたりしますね。小説のストーリーだけじゃなく、今日は

帰ったらなにを食べようかな、とかね(笑)。ほら、食い合わせがあるからね。昨日寿司なら今日はステーキだ、とかさ」

「好き嫌がなく、いろんなものを召し上がるんですか？」

「そうですね。ステーキなら二〇〇グラム」

「結構な量ですね！」

「出されたものは残しちゃいけません(笑)」

「お酒もお好きなのですか？」

「三六五日。休肝日なし」

「なにを飲まれるんですか？」

「日本酒だね。ただ、こういうインタビュの前日なんかは、臭いを吹っかけちゃ悪いから、ウイスキーを少しにしていますよ」

「お気遣いいただいて、ありがとうございます」

「いいえ。じゃあ、そろそろ本題に入りますか？」

「はい、ありがとうございます。では、昔のお話からお伺いできればと思います」

「どうぞ。なんなりと聞いてください」

「まず、先生の幼少期についてお伺いしたいのですが」

「うん、もうこの歳（八七歳）ですが、僕にもちゃんとありましたよ、子どもの頃（笑）」

「そうですね（笑）。先生はどんなお子さんでしたか？」

「こまっしゃくれた子でしたね。今でいうと、ませガキってやつでした」

「ませガキですか」

「そう。うちの親父はちっぽけな町工場をやってたんです。それをお袋が手伝っていた。旋盤とかミリーリング（*1）とかプレス加工とか、そんなものをやっていましたね」

「ご両親お二人で工場を切り盛りされていたのですね」

「だから、僕が小学校の頃は日曜も仕事があつて、僕の面倒を見ていられないわけです。それで五〇銭、当時ギザギザ（*2）って呼んでましたけど、それを一枚渡されて、『アンパンでも買って、カツドウ行つておいで〜』っていわれるんですよ」

*1 ミリーリング…フライス盤。盤上の工作物を回転式刃物で削ったり切ったりする工作機械。またはその作業を指す。

「カッドウ？」

「カッドウってのは、活動写真館。映画館のことだね。一日に、だいたい三〜五本は映画がかかっていましたね。長い一本の映画や、続きものの映画だったり、現代では短い一時間もな
い映画とか、種類も多かったですよ。だけど、僕は映画に行かないでときどきヨソに行っていました。ませガキでねえ」

「ヨソというのは？」

「ふふふ、漫談です。お色気の音曲漫談(笑)」

「お色気！ それはませガキですね(笑)」

「小学校五、六年の頃だから、一二歳くらいかな。柳家三亀松やなぎやみまつ(※2)なんかね、かぶりつくように観ていたね。『こらガキ、また来たな。おめえわかんのかよ、俺の話』なんていわれましたね。でも僕だけじゃなく、ませガキはたくさんいましたよ」

「好奇心旺盛な小学生だったんですね(笑)。ご両親も、見て見ぬふりだったのですか？ 優しいご両親だったんですね」

「そうですね。でも、有り体にいうとね、私は拾いっ子なんだよ」

「拾いっ子？」

「そう。工場を経営して僕を育ててくれた父と母は、実の父母じゃないんですよ。どこから貰われたんだろうね」

「それは……。自分を育ててくれているご両親が、本当のご両親でないのを知ったのはいつごろですか？」

「戦争に行く前かな。一五歳のときだね。だからみずから志願して戦争にいった、という一面もある。いい方は悪いけど、合法的な自殺でしょう？ 特攻なんて。黙って普通の社会で死んだら問題になるけれど、アメリカの船に突っ込んでいけば、なんてコトないことだった」

「それは、自分の親が実父母ではないという事実を知ったことが、特攻隊を志願する理由の中に入っているということ？」

「まあ、入っていないとはいえないね。それに、嫌だったからね、その家もね。ろくな親じゃなくて(笑)。養父は飲んだくれで、酔えばすぐにボコボコ殴るような人だったから。僕は不

*2 柳家三亀松：一九〇一〜一九六八年。都々逸、三味線漫談家。戦前に映画漫談やお色気の音曲漫談で一世を風靡する。